

# いばら大將

東京女子高等師範學校助教

石井庄司

## 附記

「子供向の書物を百冊讀んでも殆ど九十九冊までは役に立たないものである。それよりも一冊の自傳の中からはこびきり面白い話になるやうな色々な種が蒐集できる」といふやうなことをブライアント女史の「お話の仕方」の中に書かれてゐたやうに思ふ。お話の種を子供向の書物にばかり求めず、他に眼をつけることは必要なことであらうと思ふ。此の度本誌編輯の方の求めに應じて、日頃親んでゐる古典の中から、幼児向のお話の種を御紹介することにしました。然し原文は餘り短く、また自分の文も不十分であるので、文獻を附記し、一、二氣ついた所を記し付けておくことにした。

本篇の「いばら大將」といふ題は勿論私の勝手な命名で、原典は、「常陸風土記」の茨城郡の條にある古老の傳説である。原文は漢文であるが、假名文に書き下してみるに次の如きものである。

「古老のいへらく、昔、國巢・くす俗の語に、つちくもこいひ、又やつかはぎさいふ山やまの佐伯野の佐伯あり。あまねく土窟いばやをすゑ掘り、常に穴に住み、人の來るあれば土窟に入りてかくれ、その人去ればまた野に出でて遊ぶ。狼のごまき性さがにして梟ふくろうのごまき情あり。ひそかに窺くわひて掠あめ盗み、招まぎ慰なぐさめらるゝことなく、いよいよ風俗にへだたりき。この時、大臣の族、黒坂命くろさかのみこと、出で遊べる時をうかがひて、茨棘うばらを以て穴の内に塞ふさぎ施れ、やがて騎兵うまいくさをはなちて急に逐おひせめしめき。佐伯さへも常のごまき走りて、土窟つづに歸らむか欲ほひて、ごまきごまきに茨棘うばらにかかりて衝つき害わざはひはえ、傷やつきて終に疾あみ死に散ちけき。かれ茨棘うばらを取りて縣あたの名に著あけき。」

要するに茨城うばらといふ地名の説明傳説である。原文では「うばら」即ち「うばらき」であるが、いまは「威張る大將」といふ語呂の近接を考へて「いばら」とした。土窟の攻落に茨を用ひたといふところが話の要點であるが、現今のトーチカ攻

略さと思ひ合はせて興味ある話で、子供にもわかるやうに思はれる。終の地名の由來のころは省いて、土蜘蛛が眼をさす鼻をさす、突きさされて困るこいふころで話をきるのもよからうと思ふ。

「常陸風土記」は、播磨風土記・出雲風土記なご共、古風土記といはれるもので、奈良時代の撰進にかゝるものとされてゐる。風土記の原典は群書類従其他多くの叢書類に收められてゐるが、極く手軽には岩波文庫本の風土記(定價八拾錢)がある。なほ上代文獻の總收として、大倉精神文化研究所發行の「神典」はボケット型二千百五十餘頁で古事記・日本書記・古語拾遺・祝詞・風土記・萬葉集の等が入つてゐる便利である。(定價四圓五拾錢)お話の種本として利用せられることをお奨めする。

いばら大將といふ面白いお話をしませう。みなさんは、痛い痛いミげのあるいばらを知つてゐるでせう。垣根のころにきれいな葉つばがあるので一枚戴きませうと思つて探りに行くミ、チクリミ手にミげがささつて血が出てきたり、洋服をひつかいたりするこがあるでせう。あの痛いばらといふ名前の大將のお話です。

## 二

むかし、むかし、東の方の國に土蜘蛛といふ悪者が住ん

でゐました。土蜘蛛は多勢の仲間があつて、山の中に岩屋を造つて、穴の中に暮してゐました。岩屋といふのは大きな石を澤山積みあげて、その上に土をかぶせてあるので、まるで今のトーチカ陣地みたいなものです。狭い入口があつて、内に入るに廣くなつてゐて、多勢の者がはいるこが出来なやうになつてゐます。まはりにはみんな大きな石です。土蜘蛛はふだんは、この岩屋の中にかくれてゐて、ききき麓の村へ出て来て、いろいろ悪いこをします。田や畑に作つてある野菜や果物を取つて行つたり、大事に飼つてゐる鶏をみんな盗んで行つたりします。時にはお家に火をかけて大事な寶物を持つて行つたり、また女や子供をさらつて行つたりします。

村では、土蜘蛛が出て来るミデチャンデチャンミ半鐘を鳴らして、村の人々を集め、そして防ぎました。しかしいつでも土蜘蛛はさつさ山の中の岩屋に逃げ込んで、中から石の戸を閉めてしまひますので、なんともするこが出来ません。

## 三

そこで都の方から黒坂命といふ強い大將が土蜘蛛を征伐にお出でになりました。ところが土蜘蛛は岩屋の中へ逃げてしまつて、何もするこが出来ませんので、さすがの強い大將もお困りになりました。さうしたら土蜘蛛を征

伐するこゝが出来るかき、いろ／＼お考へになりました。  
或晩のこゝ、黒坂命がおやすみになつてゐるこゝ、夢に神  
様があらはれておいでになりました。そして

「山にあるいばらを集めて土蜘蛛を攻めなさい」

と仰つしやいました。そこで大將は家來に言ひつけて、い  
ばらを薊り集めさせました。家來達は、いばらなんか集め  
て何になるのだらうと不思議に思ひながら、山に入つてい  
ばらを薊り集めました。いばらはとても痛くて家來達はす  
つかり困りました。そして誰いふさなく、黒坂命は「いばら  
大將だといふやうになりました。」

いばら大將の黒坂命は毎日常來達の指圖をして、いばら  
を薊り集めました。さうさう山のやうに一杯集りました。  
そこで用意はよしと、土蜘蛛もが麓の村へ出かけてゐる  
留守を見て、岩屋の中へぎつしりさいばらを詰め込みまし  
た。

それから不意に麓の村へ行つて、土蜘蛛を追つかけまし  
た。今度はいばら大將は馬に乗つてワッミ追つかけまし  
た。土蜘蛛は、いつものやうにぎんぎん岩屋の方へ逃げて  
行きました。先頭せんとうの者が大いそぎで岩屋に跳び込みます  
と、チクリチクリと眼や鼻を突きさされました。痛い痛い  
と外へ出ようと思つた、後からは味方の者がぎんぎん押  
しよせて來ます。そこでみんなは眼を突くやら鼻をつくや

ら手や足は血が流れるやらで大弱り。その上いばら大將は  
さつさつきの聲をつくつて攻めたててきましたので、土蜘蛛  
の方はみんないばらにひつかゝつて負けてしまひまし  
た。

そこでこの國を「いばらき」といふのださうです。

(をばり)

(三三六頁より)

にトンネルをくゞつた二人はそのトンネルのすぐさなり  
にトンネルを作る、次に二つのトンネルをくゞつて來た  
二人は又さなりにトンネルを作る、こうして一列になつ  
てトンネルに入つて行つたものが二人づゝ次々トシネ  
ルを作つて行く。一つのトンネルのグループは八人が十  
人にしておくま曲に合つてよい。

ヤマデナク サトデナク ノデモナク

全生一列圓形になりながら歩いておしまひにする。